

# 新任保育者における、保育者の専門性獲得のための 基盤形成について 2

— 保育者効力感と保育者イメージの調査から、  
中堅保育者に至るまでのプロセスに着目して —

柴 田 長 生

キーワード：新任保育者、専門性の基盤、成長  
過程、保育者イメージ

## I 研究目的

本研究は、先の研究（柴田, 2023）に引き続き、新任保育者における専門職としての保育者の成長の第一歩を促すための「保育者の専門性獲得の基盤の形成」を考察することを目的とする。先の研究では、勤務経験2年未満の新任保育者（以下、新任保育者）に、「人間関係領域に関す

る保育者効力感」（西山, 2006）と「自由な保育者イメージ」に関するアンケート調査を実施した。調査結果から、保育実践における能動的側面と受動的側面の違いに着目し、新任保育者の専門性獲得のための到達テーマとして「保育者の専門性を形成する基礎構造仮説（図1）」を想定した。本論は先の研究の続編となるので、先の研究に掲載した図1をまず再掲しておく。

図1における垂直方向のベクトルは保育者による具体的な保育実践行為を示しており、「実践できる・実践したい…」という保育者の行動

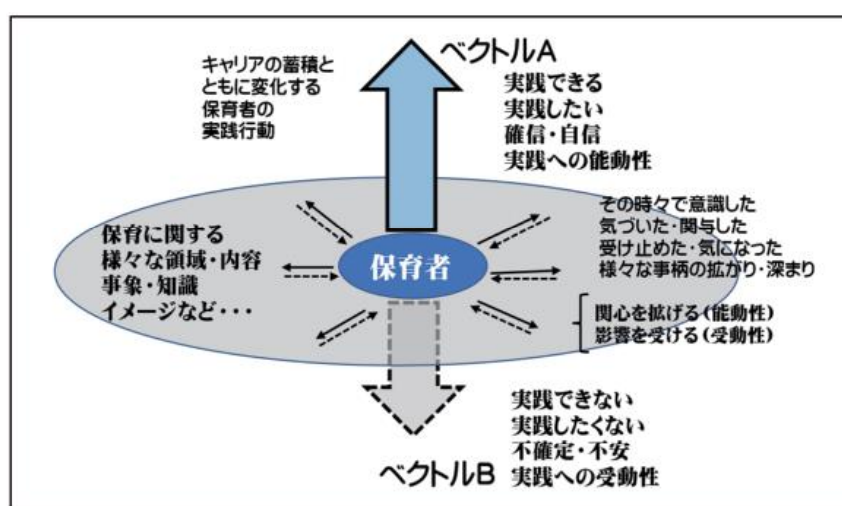


図1 保育者の専門性を形成する基礎構造仮説

における能動的な方向と（ベクトル A）、「実践できない・（自らの行動が）不確定・不安…」という受動的な方向（ベクトル B）を示している。一方水平方向の拡がりや、保育場面をめぐる様々なことへの気付きや受け止めを示しており、保育者の認知や感受性などの能力が必要となる。これらは保育実践における積極的な意味での受動的な側面であろうと考える。水平方向の領域においても、保育をめぐる諸要因に対して関心を拡げるという能動的側面と、より多様な事柄に気付き、受け止め、影響を受けるという受動的側面が想定される。そして、保育者の専門性の第一歩は、図 1 で示した能動的な内容と受動的な内容が統合された保育実践がで始めることであろう。

先の研究の調査結果では、新任保育者は、図 1 に示した保育実践における専門性の基礎構造がまだアンバランスな時期であり、主に垂直方向（行動）に対する能動的側面が優位な保育者の方が保育者効力感の評価値が高くなる傾向を呈したが、水平方向に関する気付きや受け止めに関する保育者イメージはあまり豊かではなかった。一方保育者効力感の評価値の低い群では、水平方向に関する多様なイメージ形成が始まっていたが、そのことに気づくほど保育現場では具体的にどのように対応していいのか戸惑ってしまって動けないという印象であった。そして新任保育者では、上に述べた 2 つの傾向のいずれかに乖離してしまう傾向が見られた。このような結果から、先の研究では、この時期の保育者においては、自己効力感の値が高い保育者が必ずしも保育者としての専門性の形成が進んでいる訳ではないことを考察した。

保育者や保育者の専門性の成長に関しては、多くの先行研究が存在する。「保育者の発達段階モデル」（秋田, 2000: 2001）、「保育者の熟達化プロセス」（高濱, 2000）、「保育者アイデンティ

ティとキャリア形成」（森上, 2000、西坂・森下, 2009、神長, 2015）、「保育者効力感とキャリア形成」（西山, 2006、三木・桜井, 1998）、「保育者による受容」（秀・横松・西山, 2022）、「保育者の『気付き体験』とキャリア形成」（吉田他, 2015、吉田・中川・片山, 2018、吉田・田中・西山, 2022）、「保育者効力感と実践力の認知」（上山・杉村, 2015）、「エピソード記述と専門性」（鯨岡・鯨岡, 2007）に関する先行研究については、先の研究においてレビューした。秋田（2000）の「保育者の発達モデル」を出発点としながら、西山（2006）の「保育者効力感」に代表される保育実践志向性や関係形成能力に着目した保育者における能動的側面とそのことを背景とする保育者アイデンティティの形成に関する研究を経て、「実践力の認知」（上山・杉村, 2015）、「気付き体験」（吉田他, 2015:2018）や、「保育における受容」（秀・横松・西山, 2022）といった、保育実践における受動的側面に着目した研究が行われてきており、保育者の専門性を形成基盤に関する研究は、統合されたより総合的な知見が積み上げられている。これらの研究成果を図 1 作成のために参照している。

筆者は、これまでの研究の中で、現役保育者が記述する保育者イメージは、「自らの職業内容が、それぞれの段階で腑に落ちてイメージできる内容」が記述されるという前提に立ちながら、その記述量・記述比率や記述内容の変遷を経験年数別に検討し、それらが秋田（2000、2001）の「保育者の発達段階モデル」における変遷過程とほぼ同様の結果となることを考察した（柴田, 2019:2020：2021）。保育者自身による保育者イメージ記述は一見素朴だが、一方で日々の保育実践を通して形成される保育者としての自己認識の違いによって、記述されるイメージ内容が異なることも想定された。そのような観点から、経験年数 2 年未満の新任保育者

を対象とした先の研究では、イメージ記述に加えて、西山（2006）の「人間関係領域に関する保育者効力感」の調査も実施し、保育者効力感の評価値の高低によって、イメージ記述内容が異なることを述べた。そして、記述内容の違いが、保育者としての成長段階の反映だけでなく、成長過程における個々のプロセスの特性ではないかと推察した。さらに、保育者効力感の評価値が図1における垂直方向の内容を主に標榜しているのに対して、イメージ記述の結果は、図1における水平方向の内容の分布やその拡がりの様子をよく標榜しているように思われた。これらの調査結果から、図1の「保育者の専門性を形成する基礎構造仮説」を仮想した。

保育現場の主任級の保育者から「保育者として自分が変わってきたのは、経験年数5年前後の頃」という話をよく聞いた。また、上に示した先行研究でも、その多くが「中堅保育者」の区分を、「経験年数5～6年以降」としている。上に述べたように、新任保育者は、基礎構造形成途上の段階であったので、中堅保育者に至るまでの成長のプロセスを知るためには、この先の経験年数3年以上6年未満の保育者（以下、中堅前保育者）への調査と結果の考察が重要になる。そこで、中堅保育者を、図1に示した能動的側面と受動的側面が統合された専門性を形成する基礎構造がさしあたり完成した段階と想定し、先の研究の延長として、中堅前保育者への調査を、先の研究と同様の方法で実施し、中堅保育者に至るまでの変化のプロセスに着目し、経験年数5年頃までの新任から中堅前の保育者における、専門職としての保育者の専門性の基盤の構造とその発達過程を考察することが本研究の目的である。

## Ⅱ 研究方法

2023年1月～3月に、京都府内の私立保育園・認定こども園4園に対して、勤務経験3年以上6年未満の保育者を対象とするwebによるアンケート調査を依頼し、合計40名（平均年齢24.58歳、SD:1.61）の保育者から回答を得た。経験年数による調査結果を比較するために、経験年数3年以上4年未満（以下3～4年と表記）、4年以上5年未満（以下4～5年と表記）、5年以上6年未満（以下5～6年と表記）の3つの区分に分類する。調査対象者の性別勤務経験年数別の内訳を示したのが表1である。

表1 性別経験年数別内訳

	3～4年	4～5年	5～6年	合計
男性	2	2	3	7
女性	17	7	9	33
合計	19	9	12	40

調査内容は次の通りである。

- ① 性別・年齢・勤務経験年数。
- ② 西山（2006）による「人間関係領域に関する多次元保育者効力感尺度（以下、西山尺度）」を用いた評価。因子1～5の合計25問。7件法評価実施。
- ③ 保育者になって1年目の頃を振り返り、その頃の自分を「西山尺度」を用いて評価。因子1～5の合計25問。7件法評価実施。
- ④ 「保育者に関する自由なイメージ」について、概ね20～30文字程度までで、自由に5つ記述。
- ⑤ 勤務経験1年目の頃の様子に関する自由記述。
- ⑥ 中堅保育者としてのテーマや課題に関する自由記述。

7件法評価の結果に対して、効力感の高い回

答順に7点～1点を付与し、比較群毎に平均値・標準偏差・クロンバックのアルファ値を算出した。調査には google form を用いた。自由記述された保育者イメージの分類は、保育科目担当教員との2人の合議により、KJ法（川喜田, 1967）を用いて記述内容別に分類し、コーディングを行った。データ処理には The Card 8 及び Excel 統計 2012 を使用した。勤務経験年数などの条件の違いによって、保育者イメージを構成するキーワードの違いなどを可視化するために、イメージ分析には KH コーダー（Ver3）（樋口, 2014）を用い、抽出語の共起ネットワーク図を作成した。個人情報については①の内容のみを尋ね、回答内容は勤務施設に知らせないことをアンケートに明記し、回答者の保護に留意した。なお本研究の調査内容は京都文教大学の倫理審査（京文大 22 第 97 号）で承認を受けている。

また、調査結果と考察においては、学生及び新任保育者への調査を行った先の研究（柴田, 2023）の調査データと、公立保育所保育者に行った保育士イメージ調査（柴田, 2020）の調査データを比較検討のために引用した。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 保育者効力感評価とキャリア形成

##### ① 評価結果

西山尺度（西山:2006）は、因子分析結果から「人間関係領域に関する保育者効力感」について、「人と関わる基盤をつくる」「発達の視点で子どもを捉えかかわる」「子ども同士の関係を育てる」「基本的な生活習慣・態度を育てる」「関係性の広がりを支える」という5つの因子を見だし、評価尺度構成に用いている。

西山尺度による保育者効力感の評価結果を各因子別にまとめたのが表2である。比較検討の

ために、表2には、西山（2006）の「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」で報告された調査結果（以下、西山調査）、及び筆者の先の研究による経験年数2年未満の保育者、及び保育者養成課程の学生の調査結果（柴田, 2023）を比較のために参考表記している。

後の考察に資するために、今回の調査データに対して、西山尺度による保育者効力感評価の全体評価結果における平均値以上の者を「高効力感群」、平均値未満の者を「低効力感群」とする比較群を設定し、表2にその結果を掲載している。また、調査対象者を経験年数別に細分化し、勤務経験3～4年、4～5年、5～6年の3つの区分のデータを表中に掲載している。

各評価区分における、尺度全体のクロンバックの $\alpha$ の値を表2に掲載している。高効力感群で.714、低効力感群で.725、経験年数3～4年の区分で.835、全体で.899であったが、他の区分については0.9以上の値となっており、概ね信頼できる調査データであった。西山調査（西山, 2006）では、尺度全体のクロンバックの $\alpha$ は.959と報告されている。因子別のクロンバックの $\alpha$ 値は、因子1より.843、.864、.746、.798、.778であった。

筆者調査による評価値は、先の研究における調査結果も含めて、どの区分においても西山調査よりも高い値となっている。西山（2006）によれば、保育者効力感は「『子どもの人とかかわる力の育ちに望ましい変化を与えることができる』という保育者の信念」と定義され、「効力感の強い者は、実践を活発に行い、努力し、自分の能力をうまく活かすことができ…」とされているが、前回調査に引き続き、効力感の数値結果は、今回調査においても必ずしもそれらを標榜するものではなく、むしろ現代の若者の自己評価に対する態度の特徴（高評価傾向）を



表 2 保育者効力感の調査結果比較

区分	西山調査				経験年数 3 年以上 6 年未満 (中堅前保育者)						新任保育者			学生		
	短大 2 年次	初任者	中堅	ベテ ラン	全体	高効力 感群	低効力 感群	3 ～ 4 年	4 ～ 5 年	5 ～ 6 年	全体	半年 未満	1 ～ 2 年	学生 全体	大学 4 年生	短大 2 年生
N	114	99	125	154	40	17	23	19	9	12	52	31	21	87	32	55
1. 人とかかわる基盤 をつくる	24.89 3.61	22.92 3.51	24.17 3.17	24.65 3.35	27.80 3.24	29.76 3.25	26.35 2.39	28.11 2.94	28.33 3.16	26.92 3.80	26.98 3.17	26.74 3.34	27.33 2.96	26.38 4.44	25.91 3.37	26.65 4.97
2. 発達の視点で子ども を捉えかわる	20.79 3.58	19.21 3.49	21.03 3.22	22.81 3.44	23.83 3.26	26.59 2.09	21.78 2.32	24.47 3.04	23.33 4.09	23.17 2.98	22.10 4.05	21.71 3.76	22.67 4.48	22.87 4.56	22.59 4.01	23.04 4.88
3. 子ども同士の関係 を育てる	22.95 3.74	22.69 3.27	23.58 3.06	24.50 3.18	25.05 2.79	27.29 2.17	23.39 1.90	25.42 2.43	25.33 3.35	24.25 2.96	24.15 3.42	24.00 3.44	24.38 3.47	23.89 4.01	23.78 3.23	23.95 4.43
4. 基本的な生活習慣・ 態度を育てる	23.41 3.35	22.67 3.44	23.64 3.01	24.53 3.12	25.00 2.79	27.24 2.25	23.35 1.85	25.84 2.69	24.22 2.99	24.25 2.63	24.42 3.56	23.84 3.44	25.29 3.64	24.53 4.26	24.72 3.65	24.42 4.61
5. 関係性の広がり を支える	22.13 3.70	20.57 3.77	21.80 3.12	23.20 3.41	23.35 3.48	26.41 1.84	21.09 2.54	24.21 3.43	22.22 3.70	22.83 3.35	22.73 3.80	22.84 3.63	22.57 4.13	23.56 4.29	22.97 3.42	23.91 4.72
合計	114.17 15.71	108.05 14.81	114.22 13.54	119.69 14.97	125.03 13.19	137.29 8.10	115.96 7.64	128.05 11.36	123.44 15.34	121.42 14.23	120.38 15.80	119.13 15.39	122.24 16.59	121.23 20.11	119.97 15.38	121.96 22.51
クロンバックの $\alpha$					.899	.714	.725	.835	.928	.940	.923	.922	.927	.962	.918	.975

上段：平均値 下段：SD 西山調査は、西山 (2006) から引用掲載 西山調査「初任者」は経験年数 0 年から 5 年の保育者

示しているように思われた。

## ② 勤務経験による評価値の推移

合計値の変遷を見ると、学生時代から勤務半年に向けては 121.23 から 119.13 へと少し下がるが、その後は 122.24 (1～2 年)、128.05 (3～4 年) と上昇する。そして 3～4 年がピークとなり、その後は 123.44 (4～5 年)、121.42 (5～6 年) とかなり下降する。このような評価値の変遷は何を意味するのであろうか。

新任保育者は、後の自由記述にも見られるように、着任後しばらくは「毎日が必死」の状況であることが多く、学生時代に持っていたセルフイメージと現実とのギャップが見られる。しかし一方で、その後の保育実践経験の積み上げによって、子どもと関わりたいという実践活動への志向性と、徐々に実践活動できているという実感や自信が高まっていく。そして、その時々での保育者としての対応や活動が自由になるのが経験年数 3～4 年の頃であり、このことが評価値のピークを形成することにつながっているように思われる。

西山尺度は「人間関係領域に関する保育者効力感」であるが、新任保育者の効力感評価の特徴については、先の研究でも述べたように効力感評価の高い者が、必ずしも保育現場における相対的な人間関係や、それにまつわる諸状況、あるいは個々の子どもたちの発達的な背景などを、保育者との相互関係の中で気付き、受け止められているとは限らない。換言すると、この時期の値の高さは、図 1 で示した垂直方向のベクトルの大きさを表しており、子どもとの関係に対する保育者の側からの関与・活動志向性の強さを示しているように思われる。これらのことから、新任保育者は西山尺度における保育実践における設問状況は理解しても、尺度が求める専門職である保育者に期待される、保育実践

における人間関係領域での「様々な質」については、「自分自身のありよう」として、相対的にはまだ十分な認識にはいたっていないように思われる。

評価値は、経験年数 4～5 年になると急速に低下し、5～6 年に向けてさらに緩やかに低下する。経験年数 3～4 年の区間と 4～5 年の区間は非常に特徴的であり、中堅保育者に向かう変更点として注目する必要がある。調査区間以降の経過を西山調査の結果から予想すると、その後の中堅からベテラン時代にかけて、再び徐々に上昇するのであろう。

## ③ 因子別の検討

西山 (2006) は、因子 3 の「子ども同士の関係を育てる」の評価値はキャリア形成と共に右肩上がりに上昇するのに対して、それ以外の 4 つの因子において、新任期での落ち込みを指摘し、このことの重要性を考察している、特に因子 1 の「人間関係領域に関する保育者効力感」においては「激しい振幅を示し、初任者が非常に厳しい心的状況におかれている」と述べている。しかし今回の調査では、因子 3 では西山が指摘した事柄と類似した傾向が見られたが、その他の因子における新任期の落ち込みについては明確には確認できなかった。

表 2 から因子別・区分別に評価値を見ると、以下のことが読み取れる。5 つの因子を見ると、どの評価区分においても「人と関わる基盤をつくる (因子 1)」の評価値がやや高く、「発達の視点で子どもを捉えかかわる (因子 2)」「関係性の広がりを支える (因子 5)」がやや低くなる。この傾向は西山調査でも同様であった。

西山 (2006) が「子どもとの信頼関係や安定した関係を築く領域であり、保育の中では最重要と言っても過言ではない」と述べた因子 1 の領域は、どの区分でも 5 つの因子の内で一番高

い値となる。しかも、「激しい振幅」を呈する新任期の落ち込みは見られなかった。筆者の調査における経験年数5～6年までの保育者の因子1に対する評価基準については、「保育者として子どもたちに能動的に関わることができる」とする、図1の垂直方向への保育者の側の（保育者としての自分自身の）実践活動に関する成就実感（能動的側面）を主に標榜しているように思われ、子どもとの間の相互関係や、保育実践全体への総合的な認識を意識した、子どもの側に「人と関わる基盤」を形成するような保育者としての関わりに関する評価値には必ずしもなり得ていないように思われた。

因子3の「子ども同士の関係を育てる」や、因子4「基本的な生活習慣・態度を育てる」についても因子1と同様に、保育実践における能動的側面が優位な評価課題として認識されているが、保育者が関わる目的が具体的である分だけ子どもの側に生じる結果が評価の際に意識され、因子1よりもやや低い値になるのであろう。

一方、因子2の「発達の視点で子どもを捉えかわる」や、因子5の「関係性の広がりを支える」は、これらの領域に関する保育実践において、個々の子どもの受け止めや気付きが前提になり、それらが深まってこなければ保育者としての保育実践活動が企図できず、そのことが影響して他の因子よりも評価値が低くなるのであろう。因子2・因子5の領域は、図1における水平方向（受動的側面）の拡がり意識されなければ、保育実践できない評価課題だと思われる。

興味深いのは、全体評価値が極端に低下する経験年数4～5年の区間において、因子1だけは28.33と前の区間よりも増加している点である。経験年数3～4年の頃には、保育業務の習熟と共に、保育実践の様々な場面において保育者として関与・活動・対応できるようになって

きており、そのことが保育者効力感評価値のピーク形成に関係しているのではないかということはずでに述べた。そのような経験を経て、経験年数4～5年の時期には、関与・活動・対応の能力は更に増してくる。そのことが因子1の評価値の増加につながっているのであろう。しかし同時に、因子2以下の人間関係領域に関する保育実践の領域では、評価値が低下している。このことは何を意味するのだろうか。

自ら積極的に企図する保育実践において、同時に保育実践において踏まえなければならない図1における水平方向に関する気付き・受け止めができるようになり、そのことによって因子2以後の保育実践における不十分さを認識でき始めたのであれば、保育者の成長にとっては大きな変化だと思われるし、因子2以下の評価値の低下に積極的な意味を見いだすことができるのであろう。そのようなことが生じ始めるのが経験年数4～5年の頃であり、そのような変化が因子1領域の評価値の高まりと共に生じる点が興味深い。このことを換言すれば、先の研究で述べた、新任保育者では十分には見られなかった図1における垂直方向（能動的側面）と水平方向（受動的側面）の統合が、経験年数4～5年の頃に開始されることを示しているのではないだろうか。図1に示した基礎構造が統合され始めることによって、自らの保育実践を統合的な視点から不十分だと感じ始めることが、因子2以下の評価値の低下に表れているのではないかと推測した。換言すれば、自らの保育実践に対するメタ認知が始まったことを意味するのであろう。新任保育者が中堅保育者に成長するための、図1に示した「保育者の専門性を形成する基礎構造」が形成され始め、中堅保育者へのターニングポイントを迎えるのがこの時期なのだと思う。

#### ④ 経験年数1年の頃を振り返って

今回の調査では経験年数1年のころを振り返った評価も実施したが、西山尺度の現時点の評価結果と比較したのが表3である。表中に、現在の評価値と勤務経験1年頃を振り返った評価値の差を表示している。前回調査の経験年数2年未満の新任保育者の評価結果を参考値として掲載している。

勤務経験1年頃を振り返った評価値についても、尺度全体のクロンバックの $\alpha$ を求めた。勤務経験3～4年の区分で.891であったが、その他の区分では.09以上であり、十分信頼できる調査データであった。因子別のクロンバックの $\alpha$ 値は、因子1より.930、.928、.914、.943、.922であった。

いずれの区分においても、現在と過去を振り返った評価は、表3に見られるように大きな差を示している。参考値として示した前回調査の新任保育者の評価値とも大きな差が認められる。区分別に見ると、勤務経験3～4年で合計値の差は30.72であったが、勤務経験4～5年ではその差が49.33と大きく上昇する。しかし、勤務経験5～6年では24.92少し減少してくる。保育者効力感の評価値は、ある能力や専門性の質の絶対値を評価するのではなく、それぞれの評価領域に対して、保育者である自分がどの程度保育実践できているかという「実践成就の度合い」に対する認識を標榜するのであろう。現在の自分の保育実践は過去の自分とは違っているという認識が、現在の自己評価の（実践成就感の）背景になっていると思われ、新任保育者の評価値と過去を振り返った評価値の大きな差を生じることにつながるのであろう。この観点からも、経験年数4～5年は中堅保育者へのターニングポイントの時期であろうと考えられる。

因子別に新任期との差を見ると、経験年数3～5年の2つの区分では、因子2～5に見られ

る差に比べて、因子1の「人と関わる基盤をつくる」の差はやや小さい。すでに述べたように、因子1が保育者の側の（保育者としての自分自身の）実践活動に関する成就実感（能動的側面）を主に標榜しているのであれば、因子2～5の領域での受け止めや対応については過去の未熟さを強く意識していても、ここまでの自分の歩みの中での、キャリアに応じた実践成就のイメージが受け止められていることが、因子1の評価値の特徴に関連しているのであろうか。この区分までは、保育実践者としての能動的側面を中心とした成長実感が連続しているようである。そして、その終着点として経験年数4～5年のターニングポイントを迎える。興味深いのは経験年数5～6年の区分の結果で、経験年数1年の頃を振り返った評価値との差は、それまでの区分に比べて随分小さくなり、因子毎の差の数値もかなり近似してきている。この時期において、図1で示した垂直領域と水平領域の統合が進み、新任期の完成期として「保育者の専門性を形成する基礎構造」が形成されたとすると、そのことから自分自身の新任期の頃の様子もキャリアを踏まえた相対的な認識・評価ができるようになり、新任期なりの自らの能力や成長を客観的に受け止められるようになったことによって、評価値の差の数値が小さくなってきたのではなかろうか。また、自らの保育実践も、もはや能動的側面優位な成就実感ではなくなっているのではなかろうか。そして、これらの変化こそが、中堅保育者としての入口に立たたことの証左ではなかろうか。

しかし標準偏差値に着目すると、例えば区分全体の現時点評価では合計値の標準偏差は13.19であるが、1年頃を振り返った評価では23.78とかなり評価のバラツキが増える。このことから、過去との評価差を感じる程度は、各保育者によってかなり個人差のあることが同時

表3 人間関係領域に関する保育者効力感（西山尺度）の調査結果比較（過去を振り返り返っての評価結果との比較）

区分	経験年数 3 年以上 6 年未満の保育者																		新任 保育者		
	全体			高効力感群			低効力感群			3 ～ 4 年			4 ～ 5 年			5 ～ 6 年					
	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差			
N	40			17			23			19			9			12			52		
	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差	現在	1 年 頃	差			
	27.80	22.15	5.65	29.76	24.69	5.08	26.35	20.39	5.96	28.11	23.72	4.38	28.33	19.67	8.67	26.92	21.67	5.25			
	3.24	5.59		3.25	4.50		2.39	5.68		2.94	3.25		3.16	7.30		3.80	6.60				
1. 人とかわる基盤をつくる	23.83	16.26	7.57	26.59	18.56	8.03	21.78	14.65	7.13	24.47	16.94	7.53	23.33	12.22	11.11	23.17	18.25	4.92			
2. 発達の観点で子どもを捉えかわる	3.26	5.30		2.09	4.72		2.32	5.18		3.04	4.77		4.09	4.97		2.98	5.05				
3. 子ども同士の関係を育てる	25.05	17.69	7.36	27.29	19.75	7.54	23.39	16.26	7.13	25.42	18.50	6.92	25.33	14.67	10.67	24.25	18.75	5.50			
4. 基本的な生活習慣・態度を育てる	2.79	4.95		2.17	4.45		1.90	4.85		2.43	4.00		3.35	5.59		2.96	5.22				
5. 関係性の広がりを支える	25.00	18.51	6.49	27.24	20.56	6.67	23.35	17.09	6.26	25.84	19.94	5.90	24.22	14.56	9.67	24.25	19.33	4.92			
	2.79	5.23		2.25	4.27		1.85	5.43		2.69	3.83		2.99	6.04		2.63	5.31				
	23.35	17.10	6.25	26.41	19.00	7.41	21.09	15.78	5.30	24.21	18.22	5.99	22.22	13.00	9.22	22.83	18.50	4.33			
	3.48	4.87		1.84	4.18		2.54	4.96		3.43	4.14		3.70	4.00		3.35	5.09				
合計	125.03	91.72	33.31	137.29	102.56	34.73	115.96	84.17	31.78	128.05	97.33	30.72	123.44	74.11	49.33	121.42	96.50	24.92			
クロンバックのα	13.19	23.78		8.10	19.45		7.64	23.96		11.36	16.80		15.34	25.96		14.23	26.41				
	.899	.952		.714	.926		.725	.952		.835	.891		.928	.950		.940	.980				
																		.923			

上段：平均値 下段：SD 西山調査は、西山（2006）から引用掲載 西山調査「初任者」は経験年数0年から5年の保育者



に推測される。

#### ⑤ 保育者効力感尺度が意味すること

これらの結果から、少なくとも新任期から中堅前期の保育者においては、保育者効力感の評価値は絶対的なものではなく、それぞれの時期における専門家としての達成水準（発達水準）を土台に形成される「…保育者の信念」やその自信の程度などを表しており、きわめて相対的で実践への成就実感が優位な（保育実践の能動性優位）値なのだと考える。それゆえ、保育者効力感評価を検討するに当たっては、因子1から5の各評価値の分布や、保育者経験年数、及び被評価者の保育者としての成長や質を構成する専門基盤の形成や専門基盤の構造などを同時に考慮することが重要であろう。

## 2 保育者イメージについて

### ① 保育者イメージの分類

経験年数3年～6年未満の保育者40名から175件の回答を得た。先の研究（柴田, 2019; 2020:2021:2023）で行った調査と同様に、KJ法を用いて保育士イメージに関する自由記述をカテゴライズした。分類作業は、先の研究結果と比較検討するために先の研究で使用したイメージコードに準拠して行ったが、今回もほぼ矛盾なく分類することができた。

分類作業によって67のイメージ内容を抽出した。分類されたイメージ内容を12の副カテゴリー（以下、副分類と記述）に集約し、12の副分類から「**子どもの受け止め**」（副分類として「感情（8）」「感性（5）」「態度（13）」、「**保育**」（副分類として「目的（5）」「子ども育成（5）」「保育内容（4）」、「**保護者**」（副分類として「関係（2）」「支援（4）」、「**保育士**」（副分類として「役割（4）」「専門職（8）」「職域・保育士職（3）」「保育士職感想（6）」の4つのカテゴリー

（主分類）を抽出することができた。副分類の括弧内の数値は、各副分類に含まれるイメージ内容の数を表している。記述の中に複数の内容が混在する場合は、ダブルカウントした。今回の調査結果から、KJ法によって抽出されたイメージ内容（付与コード）についてまとめたものが表4である。先の調査結果と比較するために、表4において今回の調査で新たに抽出されたイメージ内容を太字表記し（8項目）、逆に先の研究で抽出されたが今回の調査で抽出されなかったイメージ内容（28項目）をカッコ表記している。

今回新たに抽出されたイメージ内容に着目すると、主分類2: 保育では、「子どもに合った保育（コード218）」「子どもの活動保障・活動支援（225）」というように、個々の子どもを受け止めた上での保育内容の設定がイメージされたり、主分類1: 子どもの受け止めでは、「肯定的な感情を伴う関わり・受け止め（144）」「傾聴する（145）」というように、子どもとの相互関係を通した保育者自身の感情が伴う子どもへの関与態度がイメージされていた。これらは中堅前保育者としての成長特徴とも関連するイメージ記述だと思われた。

### ② 保育者イメージの分布の推移

保育者イメージの回答結果について、副分類までの回答比率を調査対象別および比較群別にまとめたのが図2である。今回の調査対象については、勤務経験3年～4年未満、4年～6年未満の2区分についても図中に表示している。比較のため、学生・新任保育者への前回調査結果（柴田, 2023）及び公立保育所保育士への調査結果（柴田, 2020）についても掲載している。数値（%）は、主分類の回答比率を示している。なお、経験年数4～6年の区間の調査数が少ないので、1年間隔の区分ではなく合算して処理

表 4 分類コード一覧

主分類 1   子どもの受け止め			主分類 2   保育			主分類 3   保護者			主分類 4   保育士				
副分類	コード	内容	副分類	コード	内容	副分類	コード	内容	副分類	コード	内容		
感情 8	111	愛情・思いやり	目的 5	(211)	子ども尊重・子ども第一	関係 2	311	安心・信頼	役割 4	(411)	憧れ・モデル		
	(112)	愛着		212	安心・信頼		312	相談		412	お手本		
	113	子ども好き		213	命を守る・大切に		(313)	コミュニケーション・聴く		413	親に代わって		
	114	優しい・明るい		214	安全		(314)	保護者に近い		414	子どもの理解者		
	115	元気		215	人格・人間基盤の形成		(315)	保護者理解（気づく）		415	その他役割		
	116	笑顔		217	子どもの可能性・能力をひきだす	支援 4	321	保護者支援	専門職 8	421	専門職		
	117	厳しさ					(216)	守る		(322)	保護者育成	(422)	発達・資質の伸長
	118	楽しい					323	保護者と共に		423	保育技能		
119	柔らかか・温か・おだやか	217	子どもの可能性・能力をひきだす	324	関わる・見守る		424	遊びの能力					
感性 5	121	子どもと共に	218	子どもに合った保育			325	親子調整		425	資質		
	(122)	子どもへの共感	子ども育成 5	221		自立支援	426	性格・特性					
	(123)	子どもから気づく・学ぶ		(222)		子育て援助			427	保育士の喜び			
	124	身近に感じる		(223)		生活習慣・生きる力			(428)	保育方針			
	(125)	遊び・保育を楽しむ		224		社会性・友人関係・人間関係			(429)	その他			
	126	子どもへの所感		225		子どもの活動保障・活動支援			430	保育者の成長			
	127	子どもを受け止める・理解する		保育内容 4		226			育てる・育む・保育	431	責任ある仕事		
	128	成長を感じる・見届ける				227			発達を考慮して	職域保育士職 3	441	地域・連携	
態度 13	(131)	子ども目線				(228)	預かる	442	労働特性				
	132	子ども一番・ありのままに	231			しつけ	443	職員協力・人間関係					
	133	寄り添う	232			健康管理	(444)	その他保育士					
	134	見守る	(233)			保育・教育	(445)	その他職域					
	135	一人一人	234			環境作り・環境整備	(446)	必要条件					
	(136)	支える	(235)			遊び・生活の伝承	保育士職感想 6	451	労働条件悪い				
	137	肯定的関わり・受け止め	(236)	食育		452		大変					
	138	子どもの代弁	237	楽しいこと・遊びを提供する		453		責任・リスク					
	139	発達を受け止める				454		忙しい・仕事多い					
	(140)	関わる・接する				455		女性社会					
	141	子どもと遊ぶ				(456)		職員間・上下関係					
	142	子どもを（子どもの気持ち）大切に				457		人間関係が大変					
	143	発達を促す				(458)		その他					
	144	肯定的な感情を伴う関わり・受け止め											
	145	傾聴する											
	146	子どもの居場所・よりどころとなる											

注   太字は、今回の分類で新たに設定した内容コード

（   ）は、今回の回答の中になかった内容コード

注 太字は、今回の分類で新たに設定した内容コード  
 ( ) は、今回の回答の中になかった内容コード

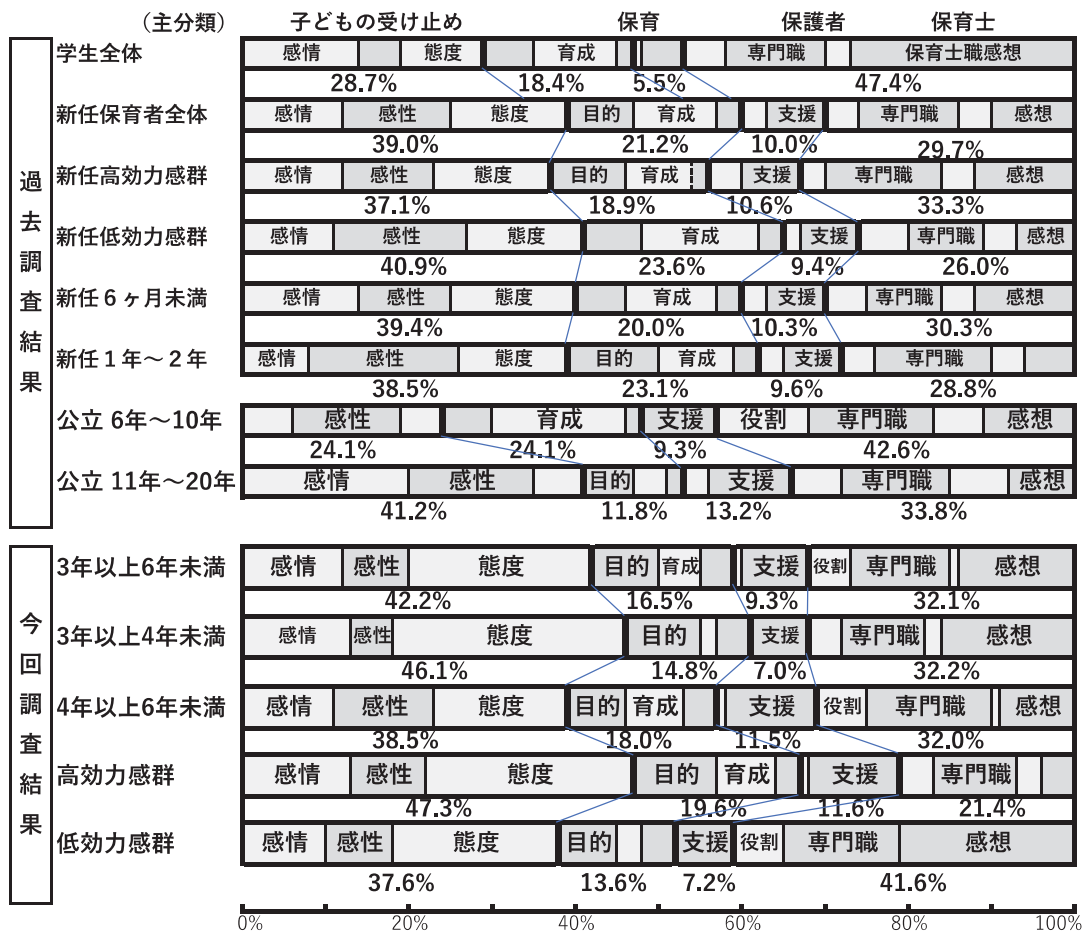


図2 保育者イメージの回答比率の比較（主分類・副分類内容別回答比率）

している。

中堅前保育者においても、新任保育者と同様に主分類「子どもの受け止め」の比率が高い値となる。新任保育者については先の研究（柴田, 2023）で「新任保育者の勤務経験別（勤務経験6ヶ月未満・1年～2年）に眺めてみると、主分類『子どもの受け止め』の比率はともに高い値となるが、副分類の比率を見ると勤務経験1年～2年では『(子どもへの)感情』が減り、『(子どもへの)感性』が大きく増えている。ストレートな子どもへの思いの表現から、子どもへのことを自分自身の内面に受け止めた上で、そこから産出される自分自身に内在するイメージ（あ

るいは子ども観のようなもの）に変わってきており、このプロセスの中に保育者としての成長の方向を見いだすことができよう」と考察している。主分類「子どもの受け止め」の比率の高さは、経験年数3～4年で46.1%とピークを迎えるが、経験年数4年～6年になると38.6%とかなり減少する。

注目すべきは経験年数3～4年における副分類の比率の構成で、「(子どもに対する)感性」がかなり減少し、「(子どもへの)態度」が大幅に増えている。副分類「態度」には、例えば「寄り添う」といった保育者としての子どもへの素朴な行為もあれば、例えばコード144「肯定的

な感情を伴う関わり・受け止め」のような、その時々の子どもを受け止めた上での、子どもとの相互関係を通した保育者としての関わりも含まれる。このような特徴から、経験年数3～4年になると、その時々に応じた保育者としての関わりがかなり豊かになり、それが保育者としての「保育実践実感」として跳ね返ってくるのであろう。先に考察したように、保育者の側からの実践優位な（能動性優位な）、図1の垂直方向へのベクトルがとて強くなる時期なのであろうが、それらの保育者の側からの行為の中に、状況に応じた図1の水平方向への意識や気付きのようなものの統合が生まれ始めている時期でもあるのだらう。そして、そのようなことが、結果としての副分類「態度」の増加に反映されるのだと思われる。この特徴は、すでに新任保育者で考察した状況は変化し始めていることを示しているのだらう。

しかし、経験年数4～6年になると、主分類「子どもの受け止め」の比率は38.5%となり、副分類「態度」が減少して、3つの副分類のバランスは均等に近づいてくる。その他の主分類では、「育成」「(保護者)支援」「(保育の)専門職」といった副分類も増えてくる。すでに考察したように、この区分は経験年数4～5年のターニングポイントの時期を経て、図1で示した「保育者の専門性を形成する基礎構造」が形成されられると思われる時期であり、保育者としての保育行動一辺倒ではなくなり、保育専門職として保育者ということが意識され始めてきているのであろう。保育実践の客観化・相対化が始まったともいえるこの時期は、まさに中堅前の保育者の段階と言える。主分類「保育」や主分類「保護者」の割合も前の時期から増えてきている。

過去の公立保育所調査結果からこの先を少し考察すると、経験年数6年～10年では、主分

類「子どもの受け止め」に比率が更に下がり、保育者側からの保育行為を標榜するのであろう副分類「態度」もかなり少なくなる。それと共に副分類「保育」が増え、副分類「育成」が増えてくる。また「(保護者)支援」「(保育の)専門性」も、経験年数4～6年と同様の比率を維持する。この時期は中堅保育者の時期であり、全体や個別の状況に応じた受け止めによる保育実践と、いろんな背景を認識した相対的な配慮や対応ができるようになる。この際に、中堅前時代から育んできた「保育者の専門性を形成する基礎構造」が、保育実践を拓げるための核になるのだと思われる。

経験年数11年～20年では、主分類「子どもの受け止め」が41.2%と再び拡がり、主分類「保育」が縮小している。中堅保育者の時代に成立する、上に述べたような保育実践行為は、専門職としてもはや当たり前のようにできるようになり、その上で保育対象である子ども達への意識に再び回帰している。しかも、「(子どもへの)感情」「(こどもに対する)感性」が、初任期と同じような比率となるのは興味深い。初任期が「子どもへの可愛さ」であるのなら、ベテラン保育者のそれは「子どもへの愛」とでも表現できるかもしれない。

中堅前期における高効力感群と低効力感群を比較すると、高効力感群では主分類「子どもの受け止め」の比率が47.3%と今回調査の比較区分の中で一番大きく、副分類では「態度」の比率が非常に大きい。この特徴は、中堅前期における充実した保育実践志向を示す特徴であると埋め止められる。そしてその一方で、中堅期への橋渡しとなる副分類「(保育の)目的」「(保育による)育成」「(保護者)支援」に関する一定のイメージ記述が同時に認められた。これは新任期の高効力感群に見られた実践活動志向のみが優位な群という特徴とは異なっており、保

育者としての保育実践への積極性の中で、保育実践を通して「保育者の専門性を形成する基礎構造」も同時に形成されてきている活発な群だと推測される。一方、低効力感群は、保育者イメージの構成は、中堅前の他の区分と類似した構成を持ちながらも、特記できるような特徴をあまり持たない群であり、保育者としての保育実践についてはむしろ消極的であったり不活発であったりする群ではないだろうか。この群では、ネガティブな保育労働条件への記述である副分類「保育者職感想（コード451～457）」の比率が高くなっている。保育者効力感の評価値の高さに関する解釈は、中堅前期あたりから、西山（2006）が述べたような保育者の質と力量を標榜する値に徐々に始まり始めるように思われた。

### ③ 抽出語による共起ネットワーク図

保育者イメージの記述内容をキャリア別に可

視化して比較するために、KH コーダー（Ver3）（樋口, 2014）を用いて抽出語の共起ネットワーク図を作成した。今回調査の中堅前保育者のテキストデータから、「3～4年」と「4～6年」の2つの区分を比較したのが図3、中堅前保育者全体と、公立保育所調査（柴田, 2020）における経験年数10年以上のテキストデータを比較したのが図4である。

両図の中央部には、似通った語群が関連付けられている（点線で囲った部分）。すでに述べたように、図1に示した「保育者の専門性を形成する基礎構造」は、経験年数3～4年の頃からできあがり始め、中堅期までには完成されると考えている。点線で囲った両図の中央部の語群は、基礎構造を踏まえた自らの中で「腑に落ちている」保育者イメージを表現する語群となっているのであろう。

一方、両図におけるキャリア区分表示から左右に独立して描かれている語群は、基礎構造の

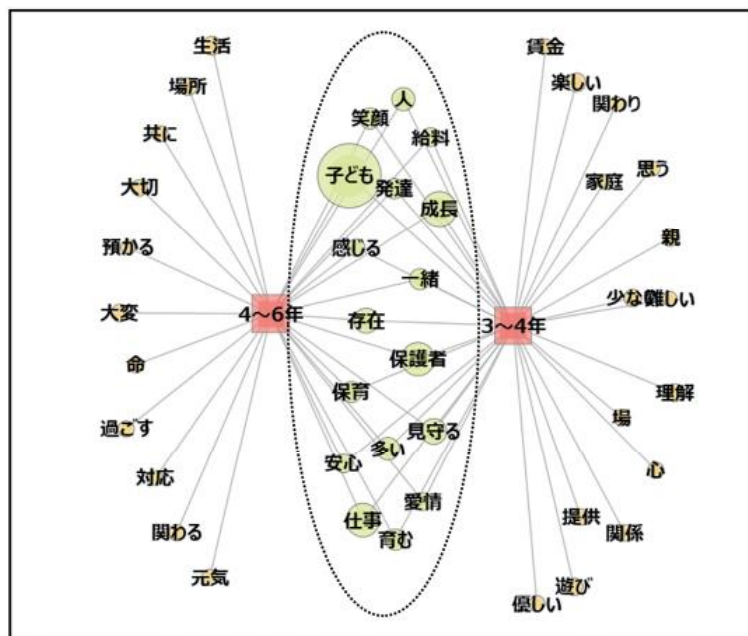


図3 抽出語による共起ネットワーク図  
—経験年数3～4年と4～6年の比較—



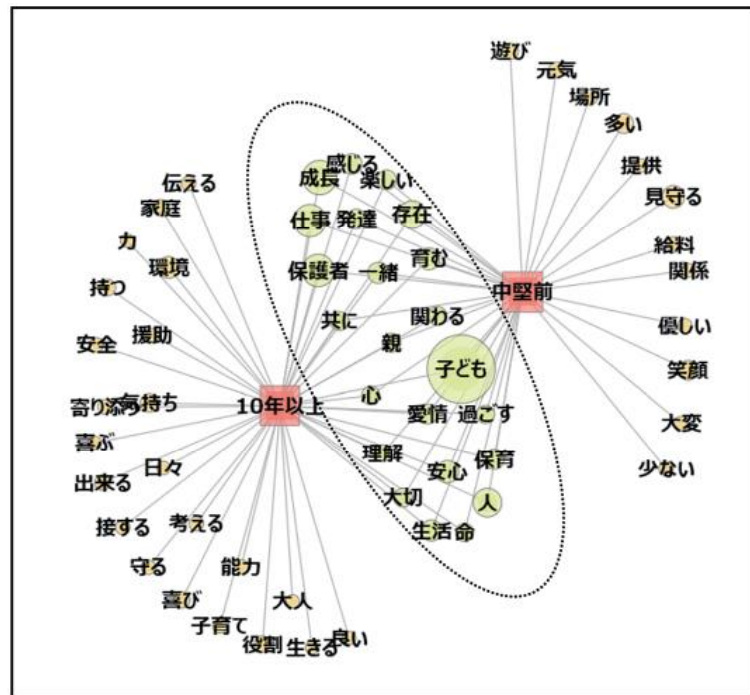


図4 抽出語による共起ネットワーク図  
—中堅前と経験年数10年以上の比較—

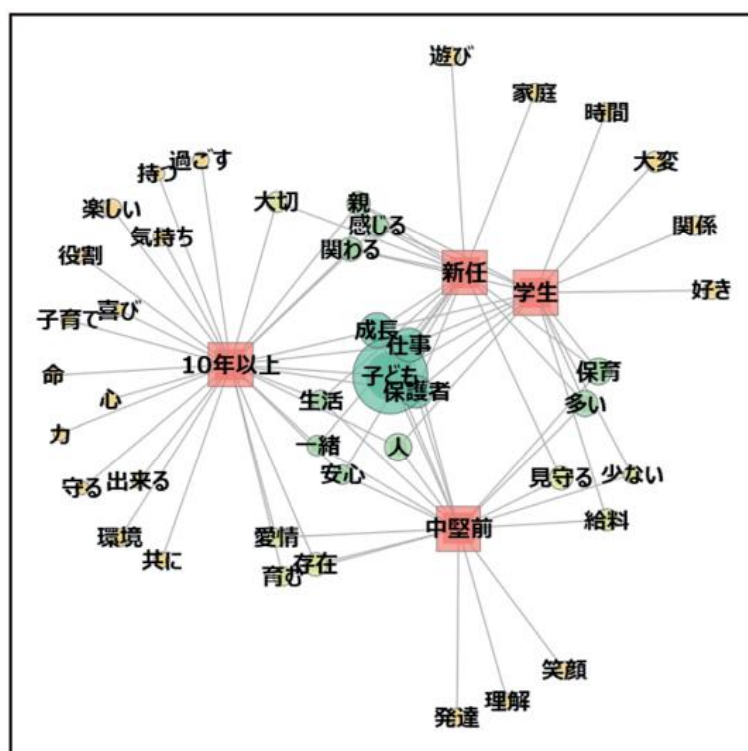
水平方向を構成する「保育に関する様々な領域・内容・事象・知識など」の保育実践での拡がりの内容を標榜しているように思われる。これには、子ども達の個別理解やそれを踏まえた到達課題の設定ということもあれば、クラス経営・年間行事や、園内での役割といったより全体的な事柄も含まれる。中堅前期を比較した図3では、3～4年では具体的な保育者の行為をイメージする語群が多いのに対して、4～6年では「生活」「命」「対応」といった保育行為を形成する客観的かつ基礎となるイメージ語が含まれてくる。いわば自らの職を客観的に俯瞰して受け止めなおすメタの視点からイメージが形成され始める。

しかし、中堅期以降となる10年以上と中堅前期を比較した図4では、左右に独立して拡がる語群の豊かさが2つのキャリア区分で大きく異なっている。このことから、基礎構造が形成

された中堅前保育者の中堅保育者に向けた成長課題は、図1の水平方向に拡がる様々な領域を保育実践の中で受け止め、それらへの保育者としての受動性と能動性のバランスを形成しながら、基礎構造を拡げていくことであろうと推測される。

図5は、学生・新任保育者・中堅前保育者・10年以上の保育者の保育者イメージ記述を用いた抽出語による共起ネットワーク図である。先の調査（柴田, 2020:2023）で得られたテキストデータを使用して作図した。

図5には、図3・4で考察した内容が保育者のキャリア変遷の結果としてよく描かれている。学生・新任期からは、図1の水平方向への受け止めからイメージされる語がほとんど紐付けられていない。それが学生期から保育経験10年以上に向けてどのように発展していくのかがよく描き出されていると思われる。



また、新任期と10年以上の区分の間で関連付けられている(中堅前期には紐付けられない)語群は「感じる」「関わる」「大切」という「子どもの受け止め」をストレートにイメージする語である。経験年数10年以上になると再び「子どもの受け止め」に関する叙述の比率が増えることはすでに考察したが、基礎構造を拡大・発展させた後の「子ども回帰」のようなことがさらなる保育者の成長となるのであろう。

今回の調査では、一つのイメージ記述の中に複数のイメージ内容を組み合わせた回答が多く、175 件の回答中 57 件 (32.6%) がそうであった。組み合わせ方の様子を示すために、副分類同士の組み合わせ数を示したのが表 5 である。

表5に見られるように、同一の副分類であるが、異なるイメージ内容が組み合わせられて併記されている回答が21件、主分類は同じであるが、異なる副分類内容が組み合わせられている回答が7件、異なる主分類にまたがってイメージ

表5 複数内容が含まれる記述における記述内での副分類の組み合わせ

内容分類 (副分類)	子ども		保育			保護者	保育者			
	感情	態度	目的	育成	内容	保護者支援	役割	専門職	職域職制	職感想
子ども	感情	11	0	1	0	0	0	1	0	1
	感性	0	2	2	0	0	1	2	4	1
	態度	0	8	5	0	1	2	2	3	0
保育	目的			1	1	1	0	1	2	0
	育成			0	1	3	3	0	1	0
	内容			0	0	0	0	0	0	0
保護者	保護者関係						0	0	9	0
	保護者支援						0	1	2	0
保育者	役割							0	0	0
	専門職							0	0	0
	職域・職制							0	0	0
	職感想							0	0	2

注) 全回答の中で、重複内容の記述があったものの比率 32.6%

記述されている回答が29件となった。このことは、自らの職である保育者に対して持つイメージが複合的・複線的になっているということを示しており、このことは、図1で示した垂直・水平方向に拡がり、保育実践（能動的側面）と、実践の中で気付き受け止めること（受動的側面）とが統合されており、現在の自分の姿として複合的にイメージされていることが大いに関連しているように思われた。すでに繰り返し考察している中堅前保育者の成長のプロセス

が、複数内容が含まれるイメージ記述の多さにもよく現れているように思われた。

### 3 自由記述について

勤務経験1年目の頃の様子に関する自由記述と、中堅保育者としての現在の課題や目標に関する自由記述の結果についてまとめたのが表6である。表中の件数は、表中に示した「内容」に関連した記述件数を示している。

表6にあるように、1年頃の振り返りでは、

表6 自由記述の集約結果

勤務経験1年頃の振り返り		現在の課題・目標	
内容	件数	内容(キーワード)	件数
慣れない環境・毎日必死だった	16	子どもの受け止め・関わり	11
反省することが多かった	12	自分への態度・気持ち・意識	10
自信がなかった	8	専門知識の向上・活用	8
先輩追従・先輩から教えてもらった	7	後輩支援・後輩からの信頼	7
よく分からなかった	6	クラス経営・リーダーシップ	7
仕事への不安・孤立感	5	保育の見通し・目標	6
保育、楽しかった・嬉しかった	5	他者への気持ち・信頼感	4
少し育ってきた・自信持てた	4	職員間・園全体での取り組み	3
保護者が苦手	2		

未熟であった頃の記述と共に、先輩との関係・保育の喜びなどの、経験年数1年頃の肯定的な部分の振り返りも記述されていた。現在の課題・目標に関する記述は、まさにこれから中堅保育者を目指す際の諸テーマであろう。

#### 4 中堅保育者に至るまでの成長過程

新任保育者が、保育のプロとしての中堅保育者に育つ際に、その要件となる「保育者の専門性獲得のための基盤の形成・獲得過程」を検討するために、保育者効力感と保育者イメージの調査を実施し、図1に示した「保育者の専門性を形成する基礎構造仮説」を想定しながら考察を試みた。先の研究（柴田, 2023）では経験年数2年までの新任保育者を扱ったので、経験年数3～6年の中堅前保育者を扱った本研究は先の研究の続編となる。

新任保育者では、図1に示した保育活動への志向性やその成就実感（保育実践における能動的側面）と、保育実践の中での周辺諸状況の気付きや受け止め（保育実践における受動的側面）が必ずしも統合されておらず、保育実践における両側面の認識はアンバランスな状況であり、いずれかの方向性が優勢となる2つの群に分かれているようであった。新任保育者が示した保育者効力感の評価値に着目すると、その評価値の高い者は能動的な側面が優勢なのに対して（周辺状況への気付き、受け止めはむしろ浅い印象）、評価値の低い者は受動的な側面が優勢であったが、保育場面での気付きなどを自らの保育活動にどう反映してよいか分からないことから来る「動けなさ（能動的側面への消極性）」が効力感評価値を引き下げている印象であった。しかし、今回調査した経験年数3～6年の中堅前保育者では、上記のような新任保育者の特徴からは大きく変化していた。そのことはすでに考察したが、中堅前期の変化の経過やその

特徴などをキャリア区分毎に以下に総括する。

**3～4年：**これまでの経験の積み上げによって、様々な保育場面での保育活動を自由に行うことができるようになる。そのことが保育者としての自信や実践成就実感につながり、子どもへの向き合いや保育活動への志向性（能動的側面）が更に高まってくる段階。そして、保育者からの保育行動一辺倒ではなく、豊かな保育実践を通して、図1でしめした水平方向への気付き・受け止めが同時に動き始める段階。

**4～5年：**前の段階に引き続き、更に自在な保育実践ができるようになってくる。その中で、図1で示した水平方向への気付き・受け止めに関する認識が急速にできるようになり（メタ認識の始まり）、保育実践内容を客観的・相対的に受け止め始めるターニングポイント期。図1で示した能動的側面と受動的側面の統合が始まり、「保育者の専門性を形成する基礎構造」ができ始める時期。

**5～6年：**保育実践内容を更に客観的・相対的に受け止めることができるようになり、初任期保育者の成長課題である「保育者の専門性を形成する基礎構造」ができあがる。同時にこれまでの自分の成長過程も客観的に受け止めることができるようになる。保育実践に対するメタ認識が形成され、中堅保育者になっていく時期。

## VI まとめと今後に向けて

本研究で扱った中堅前期は、専門職としての保育者に成長するための非常に重要な時期である。考察で述べた保育者としての変化を経て、中堅保育者へと育っていくのであろう。先の研究（柴田, 2023）で述べた、筆者のこれまでの研究に基づいて作成した保育専門職としての保育者の成長過程仮説を再掲しておく。

＊

ステップ1：養成課程初学の頃。未熟な保育者イメージの形成、風評・フィーリングの段階。

ステップ2：養成課程卒業の頃。机上学習と実習経験によって培った、一見バランスのよいイメージを形成。保育（者）に関連する多角的なイメージは網羅されるが、それぞれにつながりを持たず、バラバラに並記されたイメージの拡がりの段階。

ステップ3：勤務経験5年まで。日々の実践によって目前の子どもに強く特化され、そこからのイメージの拡がりを示す段階。初任保育実践者としてのリアリティの反映の段階。

ステップ4：保育経験5年前後の頃。「保育者としての私」という視点から、保育実践を通して充実していく「基礎構造」を俯瞰し、認識し始めることができる段階（メタ認識の成長1…自分自身の図8の基礎構造に気づき、認識し始める）。

ステップ5：保育経験10年の頃まで。ステップ4で気づき始めた自分自身の保育者特性が、図9で示した多面的で個別な関係（多様な保育実践）をとおして意識され、保育実践に反映させようとする段階。職業意識の台頭。他者との多様な関係性の視点から、保育実践が認識され、展開される段階（メタ認識の成長2…様々な実践展開の中での、より相対的な自己認知）。

ステップ6：保育経験20年目の頃まで。ステップ5で形成されたことが、専門職としての保育者、保育者の専門性という視点から俯瞰・実践できる段階（メタ認識の成長3…専門職としての自己認知）。「保育実践」と「専門性」の分節がみられる。

ステップ7：保育経験20年以降。ステップ6で形成されたことが相対化され、単に「専門家」として先鋭化するのではなく、より柔軟で高度な「総合的・複合的な専門性」が形成され、保

育実践全体に反映される時期。

本研究は、ステップ3からステップ4にかけての変遷を詳細に検討したことになる。そしてこの段階は、先に述べたように内容の異なる更に細かな質的変遷の段階があることが分かった。そして中堅前期の変化過程を歩むことが、専門職としての保育者になるための大きな発達段階であり、この時期のゴールが、図1で示した「保育者の専門性を形成する基礎構造」の完成であると考ええる。

また、初任期から中堅前期にかけては、いちばん多く離職者がでる時期であるが（濱名・中坪, 2019）、本研究で考察した内容が離職要因へ示唆を与えていると考えている。

中堅期以降の保育者の歩みは、中堅前期に形成された「保育者の専門性を形成する基礎構造」を前提としながら、保育に関する様々な要因への拡がりを認識し、それらとの相対的なやりとりを保育実践の中で実現していかなければならない（図6）。中堅保育者の大きな用務は、もはや担当する子ども達への保育実践のみにとどまらず、図6に示した様々な要因との関係を、全体的な保育実践の中で形成していかなければならないことである。

これまでの研究は、各キャリア区分の保育者を抽出して、アンケート調査の結果のみで考察したものである。また、調査人数も十分ではない。さらに、同一保育者の経時変化からの考察も行っていない。それ故、本論で述べた保育者の成長過程や、「基礎構造」は、あくまでも上記の調査結果からの推論にすぎない。しかし、考察結果は秋田（2000）を代表とする様々な先行研究の結果と比較検討する示唆を得られたと考えている。また、現役保育者による保育者イメージ記述に基づく研究はこれまでほとんど報告されておらず、素朴ではあるが、かえって現役保育者の中に「腑に落ちた」記述内容に基づ





記述入門. ミネルヴァ書房.

- ・三木和子・桜井茂男.(1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究第 46 号. (pp.203-211).
- ・森上史朗.(2000). 保育者の専門性・保育者の成長を問う. 発達 83 号 (pp.68-74). ミネルヴァ書房.
- ・西山修.(2006). 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成. 保育学研究第 44 巻第 2 号. (pp.150-160).
- ・西山修.(2006). 子どもの社会性を育むことへの保育者効力感とアイデンティティ地位との関係. 子ども社会研究 12 号. (pp.57-69).
- ・西坂小百合・森下葉子.(2009). 保育者アイデンティティの形成過程—保育実践経験 5 ～ 10 年の幼稚園教諭に対するインタビュー調査から—. 立教女学院短期大学紀要 41 (0), (pp.51-60). 学校法人立教女学院立教女学院短期大学.
- ・柴田長生.(2019). 現役保育士における「保育士イメージ」について. 心理社会的支援研究第 10 巻. (pp.3-18). 京都文教大学.
- ・柴田長生.(2020). 現役保育士における「保育士イメージ」について 2 —公立保育所保育士への調査から—. 心理社会的支援研究第 11 巻. (pp.3-20). 京都文教大学.
- ・柴田長生.(2021). 現役保育士における「保育士イメージ」について 3 —保育士志望学生への調査結果との比較から—. こども教育学部研究紀要創刊号. (pp.3-19). 京都文教大学.
- ・柴田長生.(2023). 新任保育者における、保育者の専門性獲得のための基盤形成について 1 —保育実践における能動的側面と受動的側面に着目して—. こども教育学部研究紀要第 3 集. (pp.3-18). 京都文教大学.
- ・高濱裕子.(2000). 保育者の熟達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応. 発達心理学研究 11 (3). (pp.200-211).
- ・上山瑠津子・杉村伸一郎.(2015). 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連. 教育心理学研究 63 (4). (pp.401-411).
- ・Vander Ven. K. (1988). Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. N. Saracho & D. Peterd (Eds.).

Professionalism and the early childhood practitioner. Teachers College Press. (pp.137-160).

- ・吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修.(2015). 保育経験年数から見た気付き体験の特徴. 岡山大学教師教育開発センター紀要第 5 号. (pp.9-18).
- ・吉田満穂・中川智之・片山美香.(2018). 保育実践における保育者の気付きの意味. 兵庫教育大学教育実践学論集第 19 号. (pp.75-85).
- ・吉田満穂・田中修敬・西山修.(2022). 保育実践における気付き体験と保育者効力感との関係. 応用教育心理学研究第 33 巻第 2 号. (pp.3-13).

*Abstract*

## Mid-Level Childcare Workers Develop Expertise with Experience: Survey of Childcare Worker Efficacy and Childcare Worker Image

Chosei SHIBATA

This study aimed to clarify the process by which childcare workers develop expertise in their field as they complete 5 years and 11 months of work experience. A questionnaire survey was conducted among 40 childcare workers with 3 to less than 6 years of experience.

The following points were clarified based on the childcare worker efficacy scale and description of the image of childcare workers.

### **Experience of 3 to less than 4 year:**

At this stage, workers become more active in day-to-day childcare practices and are able to carry out activities appropriate to childcare situations with confidence. By engaging in rich practice, they are able to notice and accept the varied situations around them.

### **Experience of 4 to less than 5 years:**

Childcare practices become more complex, and the worker possesses greater -awareness of surrounding situations awareness of surrounding situations. As a result, the integration of childcare practices and awareness of childcare situations begins. This period is a turning point in professional development.

### **Experience of 5 to less than 6 years:**

The Integration of childcare practice and awareness of childcare situations is complete Childcare practices become holistic and objective. The conditions for becoming a mid-level childcare worker are fulfilled at this stage.

In order for a childcare worker to grow into a childcare professional, the growth and changes that occur during the period of 3 to 6 years of experience are extremely important.

Keywords: inexperienced childcare worker, foundation of expertise, development of expertise, childcare worker image